



Lily



Pansy



Lettuce



Asparagus



Cabbage



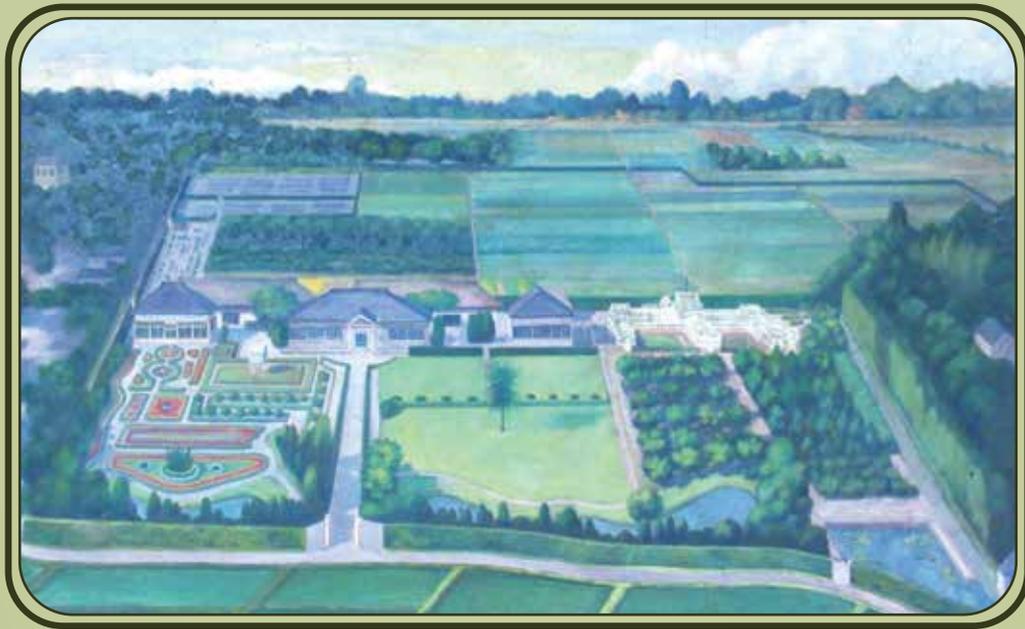
Carrot



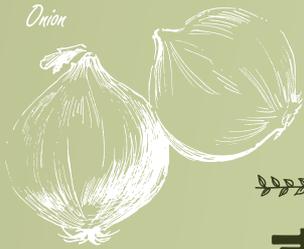
公益財団法人東京都農林水産振興財団 東京都農林総合研究センター

特別号

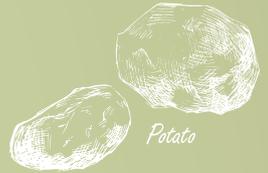
東京府立農事試験場設立から 120周年を迎えました



東京府立農事試験場 全景（現在の中野区中央）



Onion



Potato



Eggplant



Corn



Green onion



Pumpkin



Ring gong cai



Chinese cabbage



Tomato



Broccoli



Green pepper



Cauliflower



Japanese white radish



Paprika



Spinach



Grape

はじめに

東京府立農事試験場は明治33（1900）年4月に現在の中野区中央に設立され、当初は稲作技術の改善による食糧生産性向上を主要課題としていました。その後、大正13（1924）年2月に現在の立川市富士見町に移転し、昭和24（1949）年9月に東京都農業試験場と改称、平成17（2005）年4月に東京都農林水産振興財団の試験研究部門である東京都農林総合研究センター（農総研）となりました。

農総研は、農業試験場、畜産試験場、林業試験場を統合して設立され、農林業の幅広い分野を担う公設の試験研究機関として、高収益型生産管理技術や東京オリジナルブランドの開発をはじめとして多様な技術開発に取り組んでいます。

令和2（2020）年が東京府立農事試験場設立から120周年の節目となることから、農総研だより特別号として、これまでの研究の歴史を振り返るとともに、都民の皆様とこれからの研究開発の方向について意見交換を行った様子を掲載しましたので、ご覧いただけると幸いです。農総研は、今後も都民や事業者の皆様役に役立つ研究開発をめざしてまいります。

公益財団法人 東京都農林水産振興財団 東京都農林総合研究センター
所長 村上ゆり子

目次

- ◆ 沿革・現在の組織図…………… 1
- ◆ 農総研が所蔵する細密画から昔の研究を知る …… 2
- ◆ 最近の主な研究紹介 …… 6
- ◆ これからの研究開発の方向を探る …… 12
- ◆ 農総研ホームページのご紹介 …… 14

沿革

() 内の住所は現在のもの

- ▶ 明治33 (1900)年 東京府立農事試験場の設立 (中野区中央)
- ▶ 大正 9 (1920)年 東京府立種畜場の設立 (日野市豊田)
- ▶ 大正 13 (1924)年 東京府立農事試験場・東京府立種畜場が立川に移転 (立川市富士見町)
- ▶ 昭和13 (1938)年 東京府立農事試験場江戸川分場を設立 (江戸川区鹿骨)
- ▶ 昭和24 (1949)年 東京都農事試験場を東京都農業試験場に改称
- ▶ “ 東京都種畜場が青梅に移転 (青梅市新町)
- ▶ 昭和38 (1963)年 東京都農業試験場五日市分場 (林業部門) 設立 (あきる野市五日市)
- ▶ 昭和39 (1964)年 東京都種畜場を東京都畜産試験場に改称
- ▶ 昭和63 (1988)年 東京都林業試験場として東京都農業試験場から独立
- ▶ 平成 6 (1994)年 東京都林業試験場が日の出に移転 (日の出町平井)
- ▶ 平成17 (2005)年 農業・畜産・林業試験場を統合し、東京都農林水産振興財団に東京都農林総合研究センターを設置 (立川市富士見町)
- ▶ 平成18 (2006)年 東京都農林水産振興財団が東京都立食品技術センター事業を指定管理者として受託(~令和3 (2021)年3月)
(千代田区神田佐久間町)
- ▶ 令和 2 (2020)年 スマート農業推進室を設置



東京都農林水産振興財団立川庁舎本館

現在の組織図 (東京都農林水産振興財団、令和3 (2021)年4月現在)



農総研が所蔵する細密画から昔の研究を知る

東京府立農事試験場時代に、農作物の収量や大きさなどとは異なり、数値表現できない農作物の形状・断面構造や色合いなどを、実物大で正確に科学的見地から表現する手段として細密画が描かれました（表1）。細密画は正確性・保存性の低い当時の写真に代わる有効な手段であったので、農業関係者にとって農作物の形状などの特徴を知るための貴重な情報

源でした。当時、農事試験場では3人の専属絵師がおり、現在の農総研の所蔵点数は900点に及びます。

農事試験場の使命は府内の農作物収量の向上と安定化を図ることで、そのために行われた野菜、果樹、花卉（かき）の試験研究を表2に示します。この4期間の中で、野菜では、ハクサイなどの葉菜類、ナス、イチゴなどの果菜類、ウドやアスパラガスなどの茎葉菜類、ダイコンやサツマイモなどの根菜類を材料にした試験研究が行われました。果樹では、ウメやモモなどの核果（かくか）類の他、カキやナシなどを材料にした試験研究が行われ、花卉では切り花や鉢物を中心にした試験研究が行われました。

以下に農事試験場時代の研究を細密画で紹介します。

表1 所蔵する細密画の点数と内訳

種類	点数	内訳		
農作物 ^a	918	野菜 370	果樹 243	花卉 287
動物 ^a	14	カエル 1	エスカルゴ 1	ヒナ 12
図版印刷 ^b	51	果樹		
写真印刷	2	イチゴ		

（農総研細密画データベースより）

a) 東京府立農事試験場の専属絵師によって描かれたもの

b) 東京帝国大学農科大学の専属絵師によって描かれて図版にされたものと思われる

表2 4期間の野菜・果樹・花卉の試験研究

時期区分	年代	試験研究の内容		
		野菜	果樹	花卉
第1期	明治33-明治36	品種比較	試作	試作
第2期	明治37-大正7	品種比較 栽培管理	試作 委託栽培	試作 栽培管理
第3期	大正8-昭和11	品種比較 栽培管理 品種改良	試作 委託栽培	試作 栽培管理 委託栽培
第4期	昭和12-昭和24	栽培管理 品種改良	試作 委託栽培	試作 栽培管理 委託栽培

（東京都農業試験場60年史より）

品種比較：品種の収量などを比較する試験のこと
栽培管理：促成栽培や肥料効果などの試験のこと
委託栽培：品種の収量比較と苗木配布のための栽培を農家に委託すること

1 初期の試作作物

農事試験場設立の初期は試作中心の研究が行われていました。農総研が所蔵する最も古い細密画として、明治35年農事試験成績略報の口絵に花卉、フロックスドラモンデが掲載されています（図1～3）。多くの花色・花形の変異を持つことを特徴とするフロックスは、花壇花として今日に至るまで広く栽培されている時代を超えたベストセラーの花卉といえます。その原画は三つ折りの厚紙に綴じられた形で残されており、原画の代価は12円でした。



図1 農事試験成績略報表紙 (A5判)



図2 三つ折り厚紙に綴じられた原画 (A4判)



図3 農事試験成績略報口絵「フロックスドラモンデ」

2 品種比較試験

(1) 白菜

明治大正期に、白菜は漬物用としての需要が高く、不結球の白菜として「三河島菜 (ミカワシマナ)」と「曲金菜 (マガリカネナ)」、結球の白菜として「芝罘白菜 (チーフーハクサイ)」や「包頭連白菜 (ホウトウレンハクサイ)」などがあり、これらの比較試験が第2期から第3期にかけて行われました (図4~7)。



図4 白菜細密画「三河島菜」



図5 白菜細密画「曲金菜」



図6 白菜細密画「芝罘白菜」

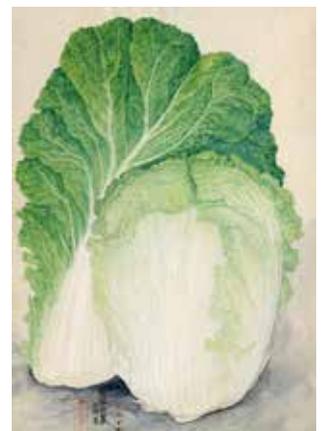


図7 白菜細密画「包頭連白菜」

(2) 果樹

当時、東京府で広く栽培されていた果樹はカキとナシで、カキは「江戸一」、ナシは「長十郎」でした。第二期の委託試験ではオウトウ（サクランボ）も栽培され、品種のひとつに「黄玉」がありました。断面構造と核や種子も正確に描かれています（図8～10）。

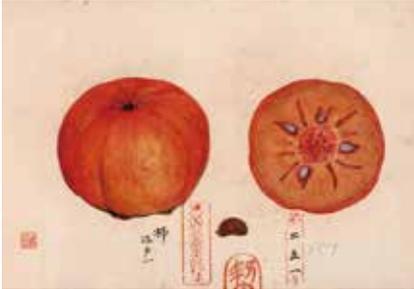


図8 カキ細密画「江戸一」



図9 ナシ細密画「長十郎」



図10 オウトウ細密画「黄玉」

3 栽培管理

(1) アスパラガス

新しい西洋野菜の栽培を生産者にわかりやすく伝えるために、植え付けの根株から地下の生育状態と出荷のための束ね方まで描かれています（図11～13）。



図11 アスパラガス細密画（根株）



図12 アスパラガス細密画（地下部）



図13 アスパラガス細密画（束）

(2) 温床と温室栽培による促成栽培



市場へ売出すに適切な大きさの促成茄子

図14 園芸之友の表紙（A5判）

本文中の説明では、右は2・3月頃採収販売に適切な大きさ、左は4・5月頃採収販売に適切な大きさ、と記述されています。

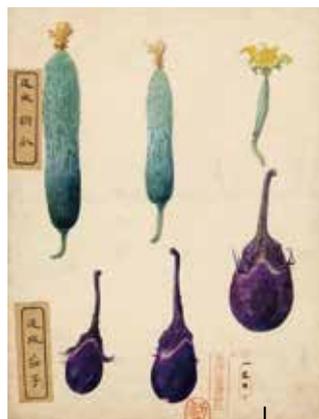


図15 表紙画のもとになった細密画

上のキュウリ、下のナスは促成栽培のもの。下のナスは中央が2・3月頃の促成ナス、右が4・5月頃の促成ナスに相当します。

4 品種改良

品種改良は第3期から第4期にかけて手掛けられ、果菜類ではイチゴとトマトがあげられます。イチゴは、「ザサン」と「ゼネラル サンジー」の交雑育種が行われ昭和3年に「昭和」が品種登録されました(図16)。トマトは、「プリンセス・オブ・ウェールス」と「ウインズール」との交雑から昭和16年に「東農二号」が品種登録されました(図17)。



図16 イチゴ細密画
(左から2番目が「昭和」の断面と正面画)



図17 トマト細密画「東農二号」

～束ね方をひと工夫～

ニンジンやダイコンなどは一定数の単位で市場出荷され売買されていました。その時、買手に新鮮であること、美味しそうに見えることは市場価値を高める重要な要素でした。細密画には束ね方をひと工夫した様子が描かれています。

図1：根長が1mに及ぶ「瀧ノ川人参」の15本束。

図2：南葛飾郡特産大根として栽培されていた「細根大根」の10本束。

図3：南多摩郡忠生村小山田で栽培されていた「根ミツバ」の束。



図1「瀧ノ川人参」の束



図2「細根大根」の束



図3「根ミツバ」の束

～試験成績の布図～

農総研には細密画のほかに農作物のイラストを描いた試験成績の布図が残されています。当時、東京、埼玉、神奈川、山梨、千葉、静岡の一府五県による園芸共進会が定期開催され、地方の農産物の展示や試験研究の成果発表が行われていました。現在の学会ポスター発表に相当します。

図1の布図はダイコンの3カ年の平均収量を示しています。「練馬大根」、「聖護院大根」、「方領大根」、「宮重大根」は明治大正期には広く栽培されていて、この品種比較試験は第2期から第3期中期まで継続して行われました。

この布図の大きさは縦80cm、横100cmで、細密画と同じく大根は実物大で描かれています。こうした布図は全国的にも珍しく、貴重なものです。



図1 ダイコン布図

最近の主な研究紹介

1 東京産農産物のブランド化を推進する

ブバルディアの東京オリジナル品種の開発～第1期3品種の普及を進めています～

ブバルディアは伊豆大島の特産切花であり、東京市場では大島産がシェア第1位を誇ります。生産者からは、大島で栽培しやすく省コストで商品性の高い東京オリジナル品種の育成を強く求められていたことから、農総研ではその育種手法を確立し、交配により約3700株を作出しました。さらに東京都島しょ農林水産総合センターや生産者の協力のもと大島で選抜を進め、第1期3品種を育成し、品種登録出願しました（令和元年8月出願公表）。3品種は可憐な一重咲で、大島の従来品種よりも花が大きくボリューム感があります。また樹勢が強く、高い収量が見込まれます。本格的な普及に向けて、大島では令和2年度から大規模な試験栽培が始まっています。



東京スター
シルキーホワイト
(品種登録出願番号33764)



東京スター
クリアピンク
(品種登録出願番号33765)



東京スター
パールピンク
(品種登録出願番号33766)

キウイフルーツ「東京ゴールド」及びイチゴ「東京おひさまベリー」の品種登録

「東京ゴールド」は、平成25年7月に新しく登録された、東京オリジナルのキウイフルーツ品種です。果肉は黄色で、先が尖った果形、一般的な「ヘイワード」に比べて糖度が高く、酸味が少ないのが特徴です（図1）。

「東京おひさまベリー」は、平成31年3月に新しく登録された、東京オリジナルの露地栽培用イチゴ品種です。従来品種と比べて糖度が高く、果実のサイズが大粒で果皮・果肉ともに柔らかすぎず痛みにくく、果肉が中まで赤いのが特徴です（図2）。

現在は、東京の特産品であるブルーベリーやウドの新品種育成を進めています。



図1 「東京ゴールド」の果実



図2 「東京おひさまベリー」の果実

江戸東京野菜の栽培技術の開発と栽培マニュアルの公開

江戸東京野菜は、江戸時代から昭和40年頃にかけて都内で作られ、人々の食生活を支えてきた東京の伝統野菜です。

農総研では、品種特性や栽培方法が不明瞭である江戸東京野菜のうち、主要5品目「寺島ナス」、「馬込半白キュウリ」、「馬込三寸ニンジン」、「亀戸ダイコン」、「ごせき晩生小松菜」について令和元年度までの栽培試験結果をもとに、栽培技術マニュアルを作成し、令和2年3月に公開しました（図1～3）。

令和3年度から新たな5品目「伝統大蔵ダイコン」、「金町コカブ」、「拝島ネギ」、「シントリ菜」、「城南小松菜」の栽培試験に取り組んでいます。



図1 栽培技術マニュアル



図2 「亀戸ダイコン」



図3 「ごせき晩生小松菜」

2 都市の緑と美しい景観を創出する

夏花の緑化マニュアルが活用されています

夏季にまちを美しい花で彩るため、栽培管理の難しい高温期にも強い花の選抜と適切な管理方法の研究を行ってきました。これまでに臨海副都心や都心部などで1200種類以上の花の栽培試験を行い、2017年度には「夏花による緑化マニュアル」を完成させました（図1）。マニュアルには、花壇苗26種類、カラーリーフ・グランドカバー29種類、つる植物6種類、球根植物9種類の合計70種類を掲載しています。2020年は、このマニュアルを活用し、東京都だけでなく、千葉県や神奈川県などの公園や商業施設など50か所以上で夏花が植栽され、生育も順調でした（図2、3）。今後も様々な都市空間で夏花が利用されることを期待しています。



図1 夏花による緑化マニュアル



図2 夏花の植栽事例（葛西臨海公園）



図3 夏花の植栽事例
（シンボルプロムナード公園）

動かせる緑陰ベンチの開発 ～夏季の暑熱対策と都市の景観向上～

夏季の暑熱対策には樹木を活用した緑陰空間の形成が有効であることから、群馬大学との共同研究により、動かせる緑陰ベンチの開発に2014年から取り組んできました。完成した緑陰ベンチは、地面に樹木を植えるのが難しい場所にも設置でき、キャスター付きで人力で押して移動できます。都内の東京ビッグサイトのエントランスプラザ（図1）などのほか、大分県大分市の祝祭の広場や大阪府守口市の大日駅前（図2）など、他府県でも活用事例が増えてきており、2021年4月現在、全国11ヵ所に計73基が設置されています。東京ではベンチに多摩産材を使用し、緑陰とミスト噴霧を組み合わせることで、真夏の無風時の体感温度を11℃低下させることができ、熱中症対策に有効であることが確認されました。



図1 動かせる緑陰ベンチの設置事例
（東京ビッグサイト）



図2 動かせる緑陰ベンチの設置事例
（大阪府守口市大日駅前）

3 生産現場が直面する問題を解決する

将来にわたり農地を健全に維持する

農業は自然相手の産業ですが、農地は長年に渡って人の手によって作られてきたものであり、管理を誤ると状態は徐々に悪化していきます。このため都内各所に定点を設け、長い期間における農地土壌の変化を調査し、対応策を検証してきました（図1、2）。

これまでに、都内の農地土壌が乗用トラクターの普及によって作土が浅くなっていることや、除草作業や少ない耕地を有効活用するために耕耘回数が増えることで、作土は軟らかくなり下層が硬くなる傾向にあることなどを確認してきました。また、近年になって石灰分やリン酸の蓄積が進んでいる状況を確認しています。作物に必須のリン酸も、過剰になると生育障害の原因となります。今後も都内農地土壌の状態を継続して調査していき、東京農業の特徴を踏まえた適正な土壌管理法を構築していきます。



図1 土壌調査の様子



図2 土壌中での根の状態

ウメ輪紋病 (PPV) を媒介するアブラムシ類の新しい防除法

2009年3月、都内のウメ産地でプラムポックスウイルス (PPV) によるウメ輪紋病の発生が国内で初めて確認されました。本ウイルスは主に *Prunus* 属の果樹 (モモ、アンズ、スモモなど) の重要病害であり、非感染地域への拡散や発生地域での蔓延を防ぐためには、媒介するアブラムシ類の防除が重要です (図1)。



図1 ウメ輪紋病
(上: 葉の病徴、下: 病気を媒介するアブラムシ類)

そこで、国や大学と共同で、発生地域におけるアブラムシ類の種類や発生消長の解明に取り組み、早春期の第一世代をターゲットとする「増える前の防除」を的確に実施することで、その後に発生する第二、第三世代のアブラムシ類を効果的に防除する新しい防除法を開発しました (図2)。現在、産地ではこの防除法を活用し、復興に向けた取組が進行中です。

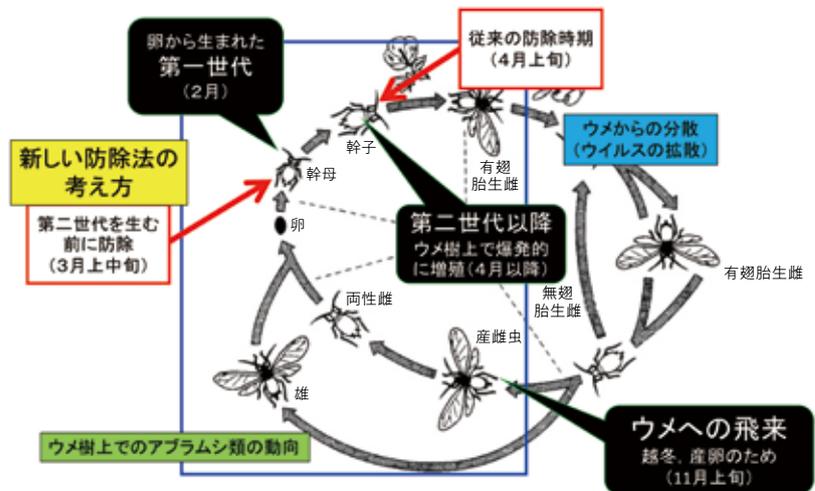


図2 アブラムシ類発生消長に基づく新しい防除法

新作型・新品種野菜の農薬残留を検証する

少量多品目栽培の多い東京では、通常の大さになる前に収穫する早どり野菜やミニ野菜などの、これまでとは出荷形態の異なる野菜のほかに、異なる部位を収穫したり、従来と異なる形状の品種も作られるようになっていきます。

通常野菜より早い段階で収穫したり、可食部の形状や部位が異なると、使用農薬の残留量は変化します。そこで実際に栽培を行って確認する試験を平成26年度から開始し、これまでにミニチンゲンサイやコマツナのナバナ的利用 (コマツナの花をナバナとして食用にするもの) で安全性を確認してきました (図1)。現在、カリフラワーの1種である花茎の長いスティックカリフラワーの安全性について検証しています (図2)。



図1 ミニチンゲンサイ



図2 スティックカリフラワー

4 先進的技術の活用により収益性の高い農業を実現する

廃液を出さないクリーンな養液栽培システム「東京エコポニック®」

養液栽培は、植物の生育がコントロールしやすく、安定して多収栽培が可能です。農総研では、小規模ハウスでも収益性の高い養液栽培システム「東京エコポニック®」を開発しました（図1）。

「東京エコポニック®」は、直管パイプを組合せたフレームに給水シートや防根透水シートを取り付け、ヤシ殻を培地にしています。培地から排出された養液を下部の貯留槽に貯め、培地に再吸収させる仕組みのため、余分な肥料が外へ排出されることがなく、環境負荷が小さくなります。灌水は、市販の水分センサー付き灌水タイマー等で給液管理でき、低コスト化を実現し、メンテナンスも容易にしました。これまで、トマトやキュウリ、パプリカでは良好に栽培できました（図2、3）。現在、都内を中心に普及し始めており、メーカーによる施工も可能です。

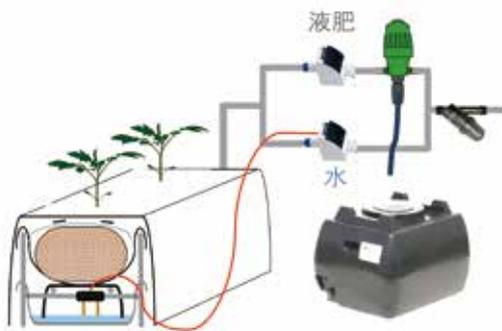


図1 「東京エコポニック®」



図2 「東京エコポニック®」によるトマト栽培



図3 「東京エコポニック®」によるパプリカ栽培

ICTを活用した環境制御技術の開発

東京のような小規模な施設栽培の生産性を高めるため、農総研ではICTを活用した小規模太陽光利用型植物工場「東京フューチャーアグリシステム®」を開発しました。骨材を大胆に減らし太陽光を最大に取り込めるハウス構造の「東京ブライトハウス®」、給液管理を自動化した養液栽培システム「東京エコポニック®」、リアルタイムで作物の光合成を最大化できる環境制御プログラム、防虫ネットへのミスト噴霧と換気扇を組み合わせた低コストの暑熱対策（ネット&ファンシステム）など、このシステムは多くの技術を融合して作物の最適な環境創出と生産の効率化を図っています（図1）。今後はさらに、システムの改良と低コスト化を図るとともに、各個別技術を生産者の必要に応じて簡易にハウスに導入できるように開発を進めていきます（図2）。



図1 明るい室内の「東京ブライトハウス®」



図2 給液管理システム制御部(開発中)

東京型スマート農業技術で農業のデジタル化を推進

少規模・多品目生産を特徴とする東京農業の「稼ぐ力」を高めるため、IoTやAI等の先端技術を活用して高収益・省力化を実現する「東京型スマート農業プロジェクト」が、令和2年4月にスタートしました。

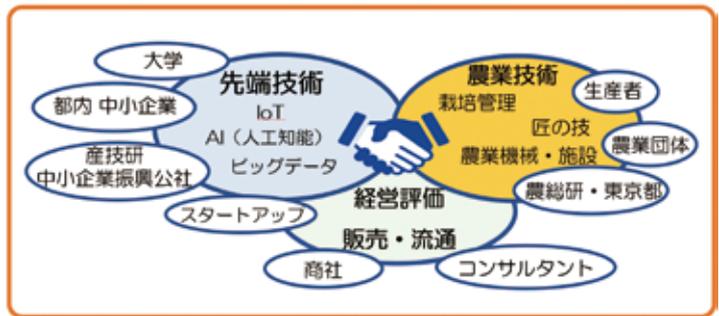


図1 東京型スマート農業研究開発プラットフォーム

プロジェクトの推進基盤として、民間企業や大学、生産者など多様なセクター

で構成する「東京型スマート農業研究開発プラットフォーム」を令和2年10月に設立し（図1）、令和3年3月3日現在で会員数は141件となっています。プラットフォームでは、東京農業のイノベーション創出に向けた勉強会や講演会等を行うとともに、会員専用Webサイトを立ち上げ、意見交換や交流を活発に行っていきます。

令和2年度に、農総研が実施した「都内生産者のスマート農業に関するニーズ調査」では、経営上の課題や、スマホやパソコン等を活用したい農業経営機能などが明らかになりました（図2）。

この調査結果をもとに、プラットフォームの会員の皆様からご提案をいただき、研究テーマごとに研究開発グループを設立し、東京型スマート農業の研究開発に取り組んでいきます（図3）。

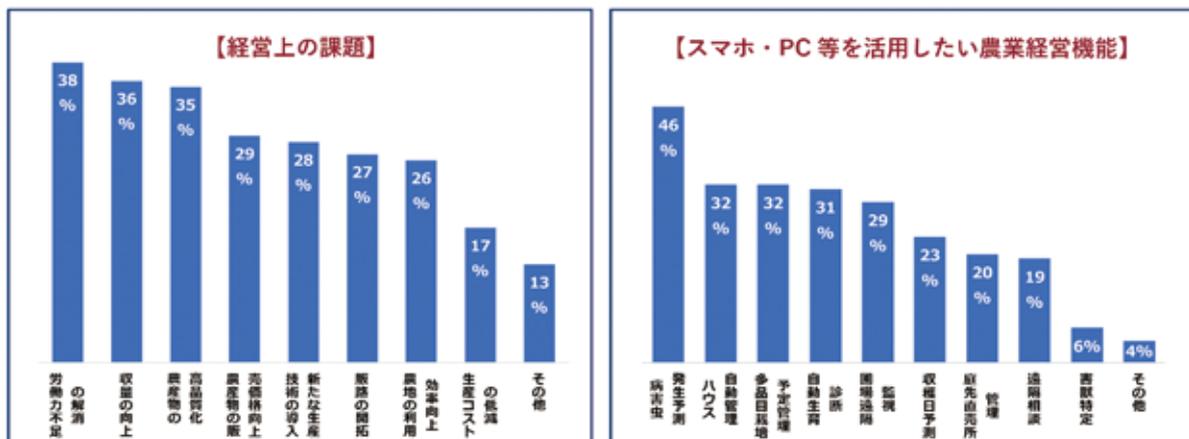


図2 都内生産者のスマート農業に関するニーズ調査（回答者128人）



庭先直売所支援システム

ソーラーエネルギーの活用

図3 研究開発のイメージ

これからの研究開発の方向を探る

令和3年2月4日(木)に「令和2年度都民と農総研の意見交換会」をオンライン開催し、都民や事業者ニーズに的確に応える研究推進の参考とするため、食と農の第一線でご活躍する5名の都民の皆様から、未来の東京農業の方向や試験研究への期待などについてご意見ご提言をいただきました。



「都民が考える未来の東京農業～都民のライフスタイルの変化に対応する試験研究とは～」



右上から時計回りに出席者を紹介します。
伊藤彰一さん(調布市農業者)
山口浩二さん(株)シュクレイ企画開発部部长
安田弘貴さん(西東京市農業者)
小野 淳さん(株)農天気代表取締役
永戸早苗さん(一社)ブランディング協会理事
村上ゆり子(農総研所長、進行役)

1 ご活躍の場面で、生活や活動がどのように変わってきていると感じますか？

〔コロナ禍の影響〕

- 農家間の交流がなくなっている。
- 消費者の農業に対する考え方が、農地を残していこう、農業と触れ合いたい、というプラスのものに変わってきていて、収穫体験などの需要が伸びている。
- 消費者はどう調理したら美味しくなるのかなど、野菜そのものに対する興味が増えている。
- 体験農園では、旅行など遠くに行けない学生が参加することが多くなった。

〔気候変動の影響〕

- 夏の暑い時期に野菜を植え付けて栽培するのが難しくなっている。
- 気候が不安定で、栽培が上手くいく年と上手くいかない年があり、非常に困っている。
- 体験農園では生産性を追求していないので、上手く育たなかったことも学びの機会にしている。
- 農業に関する情報量が多くなってきて、気象条件によって作れない農産物があるなど、消費者が理解するようになってきている。
- 加工品の場合、原料の価格が高騰していたら希少価値として売っていくなど状況を生かしている。

2 食と農の第一線にいらっしゃる状況を踏まえて、東京農業がどうあるべきと考えますか？

〔東京農業のPR〕

- 東京で農に関わる者は、都市農業を世界に発信した方がいい。大都市の中に農地が残って多様な農業が営まれていること自体、非常に価値が高い。東京では農地と近距離に都市的空間があって消費されており、地産地消では非常に恵まれた環境にある。
- 東京で良いものが作られていることをもっとアピールしたい。
- 東京産の農産物を使わせていただく際に、生産者の方とお話しをさせていただきながらご苦労や良さを伝えられるブランディングをしていきたい。

〔東京農業の可能性〕

- 人材確保が難しいスタートアップ（新たなビジネスモデルを開発する企業）に東京の農地で実証実験をしていただけたらいいのではないか。
- 果実以外のものでも、どんなものがあるか、どんな特徴があるか教えていただければ、それに合う加工も考えていきたい。

3 農総研の試験研究への期待について

〔東京独自品種の開発〕

- 少子高齢化でだんだん消費が小さくなっていく中で、海外からでもわざわざ東京に来て食べたいようなものがあつた方がいいと思う。
- 収穫体験でその場でしか食べられないようなものが開発されるとよい。

〔先端農業の研究〕

- 初期投資をかけて生産性を上げるというのではなく、庭先販売所での盗難防止や体験農園のガイドなど普通の生活の困りごとが解決されるような技術開発があると非常によい。
- 消費者にとってのスマート農業のメリットの視点が欠けている。消費者にとってのメリットを謳えるとブランディング、アピールポイントになる。
- 直売所の防犯システムとか東京でしか使わないニッチな分野の研究と、世界を見据えた産業としてのスマート農業の研究をしてほしい。後者については、スタートアップに農総研の圃場でハウスの収穫作業をやらせてあげてはどうか。
- ハウスが自動で折りたたみたり錆びにくい材質だったり、機能がもっと増えるとよい。収穫用ロボットが傾斜地などでも使うことができればスマート農業に足を踏み入れられると思う。
- 農業者が減っていく中で、国や自治体が組んでスマート農業を進めてほしい。
- スマート農業推進室は先進的な取り組みをしていて楽しみである。部署の垣根無く連携を図って現場の課題を解決していただきたい。

〔研究成果の公表〕

- もっと具体的に農薬の残留性や安全性などを周知してほしい。
- 知りたい人に研究成果が確実に届いてほしい。
- 農総研の持っている敷地や施設などの資源の活用について、どんな条件で利用可能かPRして欲しい。

4 農総研より

- コロナを契機に、農産物を食べるだけでなく体験などで身近に農業を感じてもらえるようになった。農総研も今年度はできなかったがイベントなどで農業体験ができるように工夫していきたい。
- 東京の生産物には非常に新鮮で味の良いものを消費者に届けられる大きなメリットがある。「お隣は農地です」みたいな感じでブランディングしていただくと東京農業全体が盛り上がる。
- 昨秋、農総研では東京型スマート農業研究開発プラットフォームを立ち上げた。スタートアップの実証試験については、プラットフォームの中で契約を結んだり、共同研究で試験するなどしていければと思う。
- これからも、東京独自のもの、他にはない特徴を持った品種を作っていきたい。
- 東京型のスマート農業、非常に狭いところでも回転を良くして単価を上げて稼ぐ農業をしてくためにICTの技術を使っていく。気候変動にも対応できるように制御をある程度自動でできるようにスマート化を進めていきたい。消費者にとってのスマート農業のメリットについては今後さらに考えていきたい。
- スマート農業推進室はこれからも各科と連携しながら研究を進めていく。私たちが思いつかないような課題について、いろいろな方からのご提案をいただいて課題化していけたらと考えている。
- 農総研では都内産農産物の残留農薬の検証を行っているので、その成果を都民に伝えていきたい。
- 見学受入などをHPで工夫したい。農総研では毎年度末に研究成果発表会をやっているが、今年度はオンライン開催となるためご自宅で関心のある研究を見られるようになる。皆様からいろいろな意見をいただきながら、この機会に成果の出し方を工夫していきたい。

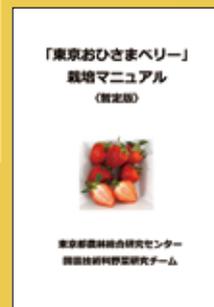
農総研ホームページのご紹介

～研究成果のデジタルライブラリー化をすすめています～



●各種技術マニュアルの掲載

江戸東京野菜主要5品目栽培技術マニュアル、「東京おひさまベリー」栽培マニュアル、キウイフルーツ「東京ゴールド」栽培ガイドブックマニュアル、夏花による緑化マニュアルなど、栽培や設置方法などのマニュアルをご覧いただけます。



●研究成果情報データベース検索システムの装備

農総研及び前身である農業試験場・畜産試験場・林業試験場で実施した試験研究成果を検索・閲覧することができます。

令和3年4月発行



育てます豊かな食とみどりの東京

公益財団法人 東京都農林水産振興財団 農林総合研究センター

〒190-0013 東京都立川市富士見町3-8-1
TEL: 042-528-5216

財団 HP: <https://tokyo-aff.or.jp>
財団 Twitter: @tokyo_tdfaff

農総研ホームページは
こちら

こちらのQRコード
からご覧ください

